

里子の受け入れが養育家庭の実子に与えた長期的影響

—実子の家族観や社会観をどう変えたか—

大澤理恵
(星槎大学)

<要 旨>

本研究の目的は、里子の受け入れが養育家庭の実子に与える長期的影響を、16歳以上の実子を対象とするインタビュー調査によって明らかにすることである。このことは、里親制度の意義を実子たちの目から見直すことにつながると考えられる。さらに、これから里親になる家庭のために「里子と実子の尊厳をまもる」手助けをすることが、最終的な目的である。調査の結果からは、参加者12人に共通する7つのテーマが見出された。また、家族観について、参加者12人全員が、成人した現在、家族は血縁関係が全てではないととらえていることが明らかになった。社会観については、実子にとって、現代社会の家族像には窮屈さがあり、多様な家族のあり方の一つである里親家庭が社会から十分に承認されず、理解されていない状況にあると感じていることが明らかになった。本研究結果から、改めて、里親は実子を家族という共同体の一員としてみるのではなく、「かけがえのない個」として尊重すること（大澤・仁平, 2024）の重要性を強調したい。

<キーワード> 里親家庭の実子、長期的影響、家族観、社会観

【はじめに】

今日、一定の家族像にとどまらない関係やライフスタイルが存在している。下夷（2023）は「現代においては、多様な家族のあり方が承認され、家族をめぐる人々の選択が十分に保障されることが重要である」と述べている。里親家庭は現代における多様な家族のあり方の一つである。

里親家庭が里子を受け入れる際に、すでに実子がいる場合が少なくない。『養育家庭体験発表集』（東京都保健福祉局, 2006~2019）のケースをみても、里子を受け入れた家庭に実子がいた割合は、52.0%になっている。また、実子にとって里親家庭での生活はプラスとマイナスの両方の影響があることが分かっている（Poland & Groze, 1993; Pugh, 1996; Duffy, 2012; Gyphen et al., 2020;

Mannion et al., 2023）。たとえば、Pugh (1996) の調査結果によると、実子は里親家庭についての好きな側面に、他人を助け「変化をもたらす」ことができる喜びを挙げ、里親家庭についての嫌いな側面に、寝室・所有物・親の関心を共有しなければならないことを挙げている。また、Walsh & Campbell (2010) は、里親の実子が認知されていないのは、里親が実子を家族の一員とみなしており、実子自身を個人とみなしていないからであると報告している。このようなことから、里親は実子を家族という共同体の一員としてみるのではなく、「かけがえのない個」として尊重することが重要である（大澤・仁平, 2024）。

海外では、里親養育と里子に関する広範な研究があるにもかかわらず、里親家庭の実子の生活

体験を取り上げた文献は著しく少ない(Adams et al., 2018 ; Richards-Garcia, 2024)。そのため、Studer (2014) は、実子から見た里親家庭の経験について研究と認識を深める必要があると述べている。日本でも同様に、実子に関する研究は著しく少ない現状にある。したがって、現在、里親家庭の実子の様態と内実という未知の現象を、質的研究を通して理解していくことが求められている。里親家庭の実子による声なき声を社会に届け、十分に理解されるようにすることが極めて重要である。

【研究の目的】

本研究の目的は、里子の受け入れが養育家庭の実子に与える長期的影響を、16 歳以上の実子に対

象とするインタビュー調査によって明らかにすることである。このことは、里親制度の意義を実子たちの目から見直すことにつながる。さらに、調査結果に基づいて「里親家庭になることが日本の実子に与える利点と問題点」の整理や「どのようにすれば実子に効果的なサポートができるか」について提言し公表することで、これから里親になる家庭のために「里子と実子の尊厳をまもる」手助けをすることが、最終的な目的である。調査で、質問項目の参考にしたのは、スウェーデンの Höjer et al. (2013) による「里親家庭になることが実子に与える影響」についての研究で得られていた、「実子にとっての利点」と「実子にとっての問題点」である(表1)。たとえば Höjer et al. (2013) は、実子にとっての利点に「自分の家族の

表1 「里親家庭になることが実子に与える影響 (Höjer et al., 2013)」

実子にとっての「利点」	実子にとっての「問題点」
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の家族の良さがわかる ・家族というチームの一員として自分が協力し、役割を果たしていると感じられる ・友だちができたと思える ・思いやりや共感性が増す ・他者の不幸について理解するようになる ・自分が他者に責任を持つことを学習する 	<ul style="list-style-type: none"> ・物、スペース、親の時間を里子に分け与えなければならぬ ・里子が経験してきた虐待など厳しい現実を知ること、子どもとしての素朴さが失われる ・ときに、自分の信頼を裏切られることを経験する ・親からの責任の期待や里子のケアラーとしての役割が重荷になる ・自分が里子に対して、仲間あるいはきょうだいとしてふるまったらよいのか、親代わりとしてふるまったらよいのか分からなくなる ・自分が家庭で周辺的な人間になったと感じる ・自分の問題を親に言いにくくなる ・里子の個人的な秘密を他の人に言えないのが重荷になる ・里子が最終的にどこに行くことになるのかまで心配になる ・親が“期待する”里子へのふるまい方に無理をして応えようとする ・親の重荷を軽くする手伝いをする“よい子”のケアラーになろうとする

良さがわかる」「家族というチームの一員として自分が協力し、役割を果たしていると感じられる」などを挙げている。

一方、実子にとっての問題点に「物、スペース、親の時間を里子に分け与えなければならない」

「里子が経験してきた虐待など厳しい現実を知ること、子どもとしての素朴さが失われる」などを挙げている。本研究では、これらの内容をもとに、質問項目を構成した。また、Höjer et al. (2013) の内容にはないが、「実子の家族観や社会観をどう変えたか」についての質問を加えた。質問項目は、里子との生活で印象に残っていることは何か、里子と一緒に生活したことを振り返り、実子の立場から現在「自分にとってよかった」と思うことはあるか、里子と一緒に生活したことで、実子の立場から「我慢はできたけれど、内心はいやだった」と思ったことはあるか、これから里親家庭の実子になる子どもたちにどのようなアドバイスをするか、里子と一緒に生活した経験を通して、「家族」というものをどのように考えるようになったか、里子と一緒に生活した経験を通して、現在、社会に対して望むことは何か、などであった。

【研究の方法】

インタビューによる質的及び量的研究法をとった。

1) 調査対象：

「特定非営利活動法人日本こども支援協会」に会員登録されている実子のいる里親に協会を通じて依頼メールを送り、趣旨に賛同した実子12人に連絡し、Zoomによって調査を行った。

全12人の実子は、7～18歳までに里子と1年以上一緒に生活し、受け入れから4年以上経過し

ていた。ファミリーホームは除外し、全て里親家庭の実子であった。また、実子は里親と血縁関係にある子であった。

2) 倫理的配慮

星槎大学研究倫理審査委員会による承認を受けた後、「特定非営利活動法人日本こども支援協会」を通じて実子のいる里親に一斉メールを送ってもらった。また、インタビュー調査の協力が得られた対象者には、研究責任者からZoomを介し口頭で研究の主旨を伝え、対象者から同意が得られた場合にインタビューを実施した。インタビューは、情報の正確性を期すため、同意を得て音声録音した。インタビューデータに個人や組織が特定される可能性のある情報を含む場合は、匿名化・抽象化処理を行った。また、データ入力時にはデータ番号をつけ、個人情報等は連結可能な匿名化を行った。

【結果と考察】

現在18歳から34歳まで（平均年齢24.4歳）の実子だった12人の成人にインタビューを行った。参加者の中には、実のきょうだいが3組あった。他の5人の参加者は、お互いに何の関係もなかった。参加者の経験には共通点もあったが、それ以上に多様性があった。サンプル数は少なかったが、様々な要因（たとえば、親が里親をした年数、親が里親を始めたときの実子の年齢、これまで一緒に暮らした里子の総数、一緒に暮らした里子の年齢、里親をしていた都道府県）があったため、参加者全員にわたって不変の要因はほとんどなかった。しかし、少なくとも参加者に共通のテーマが見出された。

【実子の経験は自分にとってよかった】

12人中12人全員（100.0%）が、実子であった

経験は、自分にとってよかったと述べた。これは、Gypen et al. (2020) の研究結果と一致する。本研究の参加者のうち、8人 (66.7%) は「いろいろな子どもと関わることがよかった」と述べた。その他に「里親制度を知ることができてよかった」と述べた参加者が2人 (16.7%)、「きょうだいが増えてうれしかった」と述べた参加者が2人 (16.7%) いた。

また、参加者のうち2人 (16.7%) は「自分が恵まれていることが分かった」と述べた。このことは、Studer (2014) の研究で、実子が「里子の行動や歴史に触れることで、自分の家族に対する感謝の念が深まった」と述べたことと一致する。

【里子と時間をかけて家族になった】

12人中12人全員 (100.0%) が、「一緒に暮しているとだんだん家族になっていく」という旨を述べた。そのうちの8人 (66.7%) は、「一時保護や短期預かりの里子は、一緒に暮らす期間が短いので、家族という感じはしなかった」とも述べた。このように、長期間一緒に暮らす里子に対して、実子は家族と感じていることが明らかになった。

一方、実子が里子を家族と思っても、里子はそうは思っていない経験をした参加者が2人 (16.7%) いた。そのうちの1人は、「広い意味での家族は結束感があれば、血縁は関係ないかなとも思うが、里子が実の親に思いを寄せているのを見ると、血縁はないがしろにはできないなと思った」と述べた。野辺 (2022) は、ひとり親家庭では「ふたり親であるべき」という家族規範が葛藤のもととなる一方で、親子間には血縁関係があるため、「血縁があるべき」という規範は意識されないこと、養子縁組家族では「親子間には血縁関係があるべき」という規範が葛藤のもととなる一方で「ふたり親であるべき」という規範は意識され

ないことを指摘している。本研究の対象である里親家庭は、親子間やきょうだい間に血縁関係がないため、野辺 (2022) の報告と同様に血縁関係を意識した回答となったものと思われる。

インタビュー結果から、実子は、全ての里子に対して家族やきょうだいと感じているわけではないことが明らかになった。具体的には、実子は里子の預かり期間によって、里子に対して家族と感じたり、預かっている子と感じたりし、感じ方が異なっていた。このことを親や里親支援機関等が理解し、里子を受け入れる際の検討事項の一つとすることが求められるだろう。

【年下の里子と一緒に暮らした】

12人中12人全員 (100.0%) が、自分より年齢が下の里子と一緒に生活したと答えた。また、12人全員が年下の里子のほうが接しやすいと述べた。参加者の1人は「里子が自分より年上だったら戸惑っていたと思う。距離感が生まれる」と述べた。これは、Nel (2014) の「ほとんどの研究では、実子が里子より年長である方が、プレースメントが成功する可能性が高い」という報告と一致する。また、Richards-Garcia (2024) の「実子と里子の年齢や性別は二人の関係に多大な影響を与えうる」という報告や、大澤・仁平 (2024) の、実子にとって里子の年齢は特に重要な情報であるという報告と同等である。

【成人した現在の家族観】

12人中12人全員 (100.0%) が、成人した現在、いろいろな形の家族があってよいと考えていること、家族は血縁関係が全てではないととらえていることについて述べた。参加者の1人は「里親家庭の実子としての経験によって、血縁関係が全てではないという考え方に变化した」と述べた。その他に「一緒に過ごす時間で愛情や家族の絆が

生まれるのだなと思った」と述べた参加者が1人、「後からでも家族になれるんだと思った」と述べた参加者が1人いた。

一方で、「自分は家族だと思っても、里子自身が、実の親への思いを捨てていない」と述べ、そのような里子の気持ちを尊重する参加者もいた。このように、本項目は【里子と時間をかけて家族になった】の項目と同様、血縁関係を意識した回答となった。

インタビュー結果から、里親家庭で暮らす実子にとって「親子やきょうだい間には血縁関係があるべき」という規範が葛藤のもととなりやすいことが明らかになった。このことを親や里親支援機関等が理解し、実子をサポートすることが求められるだろう。

【我慢はできたけれど内心は嫌だったこと】

12人中11人(91.7%)が、里子との生活の中で我慢はできたけれど、内心は嫌だったことがあったと述べた。そのうちの5人(41.7%)は、「母親を里子に取られたような感じがして嫌だった」という旨を述べた。そのうちの1人は、「成人した現在の自己肯定感の低さは、里子を迎えた時の寂しさと関係があると思う」と述べた。別の参加者は「実子と里子のけんかで、母親が里子の味方をするのが嫌だった。里子がいなければこんな思いをすることはなかったのに、と思うことがあった」と述べた。さらに別の参加者は20代前半の頃について「自分が大人になったときの母親との関係を楽しみにしていたけど、里子がいるためにそれができなくて残念だった」と述べた。他にも「自分が脇役にまわった感じがした」と述べた参加者がいた。これらの結果は、Höjer et al. (2013)の「自分が家庭で周辺的な人間になったと感じる」という報告に通じるものがある。

他にも「里子の世話が面倒くさいなと思うことはあったけど、耐えられないことはなかった」と述べた実子が2人(16.7%)いた。そのうちの1人は、「母親が家事をしているときに、自分が新生児の里子の面倒をみるしかないという雰囲気があった」と述べた。このことは、Höjer et al. (2013)の「実子は、自分たちが里子に対して善良であり、支援を惜しまないことを親から期待されていると感じていた」という報告と一致する。

このように、実子が親の重荷を軽くする手伝いをする“よい子”のケアラーになろうとすることについては、Höjer et al. (2013)による「表1 里親家庭になることが実子に与える影響」にも記されている。しかしながら、実子も1人の子どもであり、最善の利益を保障しなければならない存在であることをふまれば、“よい子”のケアラーになろうとする実子に対しては、「あなた自身もまた、大切にされるべき存在なのだ」という説明と、説明に基づく配慮が求められるだろう。

【里親家庭への偏見の低減を望んでいる】

12人中9人(75.0%)の参加者は、自分に里子のきょうだいがいると話すと、周囲から複雑な家庭、事情のある家庭という先入観をもたれていたと述べた。たとえば、参加者の1人は、友達に「里子がいる」と伝えると「複雑だね。この話、大丈夫？」と言われて嫌だったと述べ、「里親だから大変そうとかいう一方的な捉え方がなくなったらいい。里親家庭の本人たちはそうは思っていない」と語った。別の参加者は「里親制度をよく知っている人との会話は楽だった」と述べた。このように、里親家庭の実子たちは、社会に里親制度の理解が広まること、そして里親家庭が複雑な事情を抱えた家庭ではないという正しい理解が社会に広まることを望んでいることが明らかに

なった。

【里子の措置解除の経験】

措置解除とは、里子がそれまで生活していた里親家庭を離れることを意味する。本研究では12人中7人(58.3%)が、里子の措置解除により、里子との別れを経験していた。そのうちの3人(25.0%)は、里子との別れが非常に辛い経験であったと述べた。このことについて、参加者の1人は「突然の別れだった。もうちょっと丁寧に別れを経験させてもらいたかった。罪悪感が強く残り、今でも残っている」と述べた。このことは、Mannion et al. (2023) の、里子が家庭を離れるとき、それはしばしば「喪失感」として経験されること、Höjer et al. (2013) の、実子にとって措置が終了することが里親養育の最も困難な側面になるという報告と一致する。

一方、里子の措置解除を経験しても別れが辛くなかったと答えた参加者が4人(33.3%)おり、その理由は、実の親のもとに帰れるから良いことだと思ったという共通の内容であった。

このように、里子との別れは、一部の実子にとって辛い経験となることが明らかになった。参加者の1人が「罪悪感が強く残り、今でも残っている」と述べていることから、この参加者が里子との別れを境に、長期的に罪悪感をもって過ごしていることが分かる。親や里親支援機関は、里子の措置解除は実子にとって長期的な影響をもたらす出来事となることを理解し、丁寧な別れができるように配慮することが求められる。

【里親家庭の実子になる子へのアドバイス】

12人中6人(50.0%)が、「里子に対して普通に接したらいい、自然体で接したらいい」と述べた。その他、参加者の1人は「里子にストレスを感じるがあっても、里子は好きでそうなって

いるわけじゃない」と述べ、別の参加者は「実子が3～4歳のときに里子を迎え入れると実子が寂しい思いをする。受け入れのタイミングを見極めたほうがいい」と述べた。この他にも「年下の里子は迎え入れるのが楽だった」と述べた参加者が1人、「受験の期間は里子を受け入れないという親の配慮があった。実子が大切にされていると実感できることが大事」と述べた参加者が1人いた。

Höjer et al. (2013) による先行研究では「嫉妬するくらいなら、世話をしないでいいですよ！」「自分のことは自分で気をつける。慎重になりましょう」などといったアドバイスが報告されており、本研究結果には、Höjer たちの報告には含まれていなかったものがある。しかしながら、本研究で得られたインタビュー結果は、里親家庭で生活した実子たちの様態と内実を理解するうえで、重要な情報であると言える。とくに、里子を受け入れるときの実子の年齢についてのアドバイスや、年下の里子のほうが迎え入れるのが楽だということ、親の配慮を通して、自分が大切にされていることを実感できるというアドバイスは、実子であった経験を通じた貴重な内容である。

【実子の経験を踏まえ、自身が里親になるか】

12人中4人(33.3%)が、実子であった経験をふまえ、将来、自分も里親になりたいと答えた。そのうちの1人は「なりたと思う。全然辛くなかった。実子だった経験はいい思い出が多い」と述べた。別の参加者は「なりたと思う。実子の年齢が10歳くらいになってからがよいと思う」と述べた。一方、12人中8人(66.7%)が、自分は将来里親にはならないと答えた。そのうちの1人は「正直、やる自信はない。やらない。自分の子どもにこの思いをさせるのはリスクーだと思

う」と述べた。別の参加者は「無理してでもやろうとは思わない」と述べた。また、「親の姿を見て、大変そうだったからやらない」と述べた参加者もいた。このように、将来、里親にならないと答えた実子が多い結果となった。このことは、Betts (2021) の研究で、「何人かの実子は、将来里親を提供しないと答えたが、何人かは提供すると答えた」ことと一致する。また、Studer (2014) の研究で、実子が、将来里子を預かる場合には養育方法を調整しながら行うことを考えており、調整の例としては、自分の子どもが成人して家を出るまで待つ、年齢の低い里子を養育するなどがあることと一致する。

里親家庭の実子としての経験年数(10年未満と10年以上)と将来、里親になるかどうかの関係を評価するために、独立性のカイ二乗検定を実行した。分析の結果、カイ二乗統計量(χ^2)は0、自由度は1、 p 値は1.0で、2つの変数の間には有意な関係がなかった。このことから、実子としての経験年数は、将来自分が里親になるかどうかに関連がなかった。

【これからの社会に望むこと】

12人中3人(25.0%)が「里親制度が広く知られるようになってほしい」と述べた。その理由は、友達に対して里親制度の説明をするのが大変だったという経験に基づくものであった。そのため、参加者3人は里親制度が子どもも含めて広く知られるようになることを望んでいた。また、【里親家庭への偏見の低減を望んでいる】の項目と同様に、「里親家庭が、複雑な事情を抱えた家庭ではないという正しい理解が社会に広まることを望んでいる」と述べた参加者もいた。この他に、「生まれてきた子が幸せになれる社会であってほしい」、「社会人になってみてお金と時間が足りない。賃

金が安定すれば、親にも生活の余裕ができるのではないかと思う」、「世の中って血縁関係が重視されていると思う。子どもを自分で産むのが大前提。よその子を育てるという発想が広まるといい」、「社会の捉える家族像は窮屈。家族というと血縁が重視される」などの意見が挙げられた。これらは様々な意見ではあるものの、里親家庭で生活する実子の経験に基づいているという点で共通している。たとえば、「生まれてきた子が幸せになれる社会であってほしい」という意見は、里子との生活を通して実子が実感した貴重な意見である。また、【里子と時間をかけて家族になった】や【成人した現在の家族観】でも挙げられていた血縁関係に関する意見がここでも述べられていた。

このように、実子にとって、現代社会の家族像には窮屈さがあり、多様な家族のあり方の一つである里親家庭が社会から十分に承認されず、理解されていない状況にあると感じ、改善を望んでいることが明らかになった。

【里親家庭の実子の経験を語る場が無かった】

参加者12人全員(100.0%)が、これまで里親家庭の実子の経験を語る場がなかったこと、そのため、今回のインタビューが実子としての経験を振り返る機会になったと述べた。また、「里親家庭の実子であった期間に、本インタビューのように自分の経験を語る機会がほしかった」と述べた参加者もいた。このことは、Studer (2014) の「実子が自分たちの経験について話す機会をあまり与えられていないように思われる」という指摘と一致する。また、里親家庭の実子の経験を語る場が無かったことは、Gypen et al. (2020) による「実子の貢献は、親、ソーシャルワーカー、里親機関によって見落とされ、過小評価されがちである」という指摘とも一致する。したがって、実子

の声が広く社会に届き、理解されるようになることが極めて重要である。

以上、これらの調査結果に基づいて「里親家庭になることが日本の実子に与える利点と問題点」の新しい知見を表2のように整理した。

【総合考察】

実子の経験は成人した現在だから率直に語れるものが多くあった。実際、本研究の参加者は実子として生活している期間に寂しさや我慢、偏見への憤りなどを感じながら、それでも自身の家が里親家庭であることを受け入れ、成長し、成人を迎えた。中には成人した現在でも、過去の里子との別れに罪悪感をもち続けている参加者もあり、里親家庭の実子であった経験が長期的な影響をもたらすことは明らかである。

Walsh & Campbell (2010) は、里親の実子が認知されていないのは、里親が実子を家族の一員とみなしており、実子自身を個人とみなしていないからであると報告している。このようなことから

改めて、里親は実子を家族という共同体の一員としてみるのではなく、「かけがえのない個」として尊重すること（大澤・仁平, 2024）の重要性を強調したい。

次に「どのようにすれば実子に効果的なサポートができるか」について、4つの提言をする。

第1に里子を受け入れるときの実子の年齢について、本研究のインタビュー結果をもとに、実子が3歳～小学校低学年の期間を避けることを推奨する。インタビュー調査の結果から、実子が母親を取られたような寂しい気持ちを抱えて生活する場合があるという否定的な影響が明らかになった。参加者の1人は、「成人した現在の自己肯定感の低さは、里子を迎えた時の寂しさと関係があると思う」と述べており、里子を迎えるときの実子の年齢や発達段階は、否定的な影響もたらず要因の一つといえる。

第2に実子が自分の経験を語る場を設けることを推奨する。インタビュー調査の結果から、里親家庭の実子は、自分の経験を語る場がなかった

表2 「里親家庭になることが日本の実子に与える利点と問題点」の新しい知見

実子にとっての「利点」	実子にとっての「問題点」
<ul style="list-style-type: none">・世の中にはいろいろな子どもがいることが分かる。・自分の人生に感謝できる。・里親制度について知ることができる。・家族が増える喜びを感じる。・里子の成長に喜びを感じる。・乳幼児の世話の仕方が分かる。	<ul style="list-style-type: none">・母親を取られたような寂しい気持ちになる。・自分が脇役になったように感じる。・里子に気を遣って生活することがある。・自分は里子を家族だと思っていても、里子はそうは思っておらず、残念に思うことがある。・措置解除による里子との別れをつらく感じる。・実子の経験を語る場がない。・母親がつかうようにしている姿を見て、助けなくてはいけないと感じる。・社会がもつ里親家庭へのイメージや先入観を不快に感じることもある。

ことが明らかになった。参加者の1人は「里親家庭の実子であった期間に、本インタビューのように自分の経験を語る機会がほしかった」と述べた。このように、これまでの里親制度は、里親と実子を一共同体ととらえていたために、実子は自分の経験を語る場とその機会が得られなかった。しかし、実子を「かけがえのない個」として尊重するあり方へと転換することで、実子が自分の経験を語る場とその機会を得られるようになることが期待できる。

第3に、受験などの実子にとって重要な期間には、里子を受け入れない配慮を行うことを推奨する。インタビュー調査の結果から、受験の期間に里子を受け入れない親の配慮によって、実子は自分が大切にされていると実感できたことが明らかになった。親は実子も里子同様に丁寧なケアを必要とする存在であることを認識し、実子への配慮のある里親家庭をめざすことが求められる。

第4に、“よい子”のケアラーになろうとする実子に対しては、「あなた自身もまた、大切にされるべき存在なのだ」という説明と、説明に基づく配慮を丁寧に行うことを提案する。本調査結果から、表2の問題点の一つに、実子は「母親がつらそうにしている姿を見て、助けなくてはいけないと感じる」ことを記した。しかしながら、実子も1人の子どもであり、最善の利益を保障しなければならない存在であることを忘れてはならない。もしも実子が“よい子”のケアラーになろうとしているのであれば、里親は実子を家族という共同体の一員とみなしている可能性がある。実子に対しては、「あなた自身もまた、大切にされるべき存在なのだ」という説明と、説明に基づく配慮が求められるだろう。このようなことから、里子受け入れ時の実子へのインフォームド・アセントは里子の

受け入れからその後も長期間に渡って丁寧な上にも丁寧に行う必要があると考えられる。

【結論】

本研究のインタビュー結果から、参加者に共通するテーマが見出された。共通のテーマとは、①実子の経験は自分にとってよかった、②里子と時間をかけて家族になった、③年下の里子と一緒に暮らした、④年下の里子のほうが接しやすい、⑤成人した現在、いろいろな形の家族があってよいと考えている、⑥我慢はできたけれど内心は嫌なことがあった、⑦里親家庭の実子の経験を語る場が無かった、であった。

また、家族観について、参加者12人全員が、成人した現在、家族は血縁関係が全てではないととらえていることが明らかになった。社会観については、実子にとって、現代社会の家族像には窮屈さがあり、多様な家族のあり方の一つである里親家庭が社会から十分に承認されず、理解されていない状況にあると感じ、改善を望んでいることが明らかになった。

【謝辞】

本研究は、公益財団法人 明治安田こころの健康財団の研究助成金を受けて実施したものである。本助成により研究を遂行することができたことを、ここに深謝いたします。

【引用文献】

Adams, E., Hassett, A. R., & Lumsden, V. (2018). "They needed the attention more than I did": How do the birth children of foster carers experience the relationship with their parents? *Adoption & Fostering*, 42(2), 135-

150.
<https://doi.org/10.1177/0308575918773683>
(Original work published 2018)
- Betts, M. (2021). *The Lived Experience of Family in Biological Children Living in Therapeutic Foster Homes* (Doctoral dissertation, Walden University).
- Duffy, C. (2012). The impact of fostering on natural children and their involvement in the fostering process: invisible, vulnerable or valued?. Cork: Community-Academic Research Links, University College Cork.
- Gypen, L., West, D., Van Holen, F., & Vanderfaeillie, J. (2020). Birth children of foster carers: How do they experience the foster care placement. *Children and Youth Services Review, 109*, 104703.
- Höjer, I., Sebba, J., & Luke, N. (2013). The impact of fostering on foster carers' children. Rees Centre.
- Mannion, E., McCormack, D., O'Brien, T., McSpadden, H., Downes, C., & Turner, R. N. (2023). The Experiences of Foster Carers' Birth Children of Living in Fostering Families: A Qualitative Evidence Synthesis. *Adoption Quarterly*, 1-38.
- Nel, L. (2014). Children whose parents foster other children: The experiences of growing up with a foster sibling. (Doctoral dissertation, Auckland University of Technology).
- 野辺陽子(2022). 家族変動と子どもをめぐる複雑さ, 家族変動と子どもの社会学—子どものリアリティ/子どもをめぐるポリティクス. 新曜社, 201-226.
- 大澤理恵, & 仁平義明. (2024). 里親家庭が里子受け入れの際に実子から求める「インフォームド・アセント」: 実子への「インフォームド・アセント・ガイド」の作成. *豊かな高齢社会の探究 調査研究報告書/ユニバーサル財団 編, 32*, 1-29.
- Poland, D. C., & Groze, V. (1993). Effects of foster care placement on biological children in the home. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 10, 153-164.
- Pugh, G. (1996). Seen but not heard Addressing the needs of children who foster. *Adoption & Fostering*, 20(1), 35-41.
- Richards-Garcia, Melba. (2024). "A Phenomenological Study on the Adult Biological Child's Experience in a Family That Fostered" Doctoral Dissertations and Projects. 6314.
<https://digitalcommons.liberty.edu/doctoral/6314>
- 下夷美幸(2023). 現代社会と家族問題, 家族問題と家族支援. 放送大学教育振興会, 11-16.
- Studer, J.J. (2014). Exploring the experience of biological children of foster parents : their views on family as adults.
- 東京都保健福祉局少子社会対策部 (2006-2019). 『養育家庭体験発表集』 東京都保健福祉局.
- Walsh, J., & Campbell, H. (2010). *To what extent does current policy and practice pay adequate attention to the needs of the sons and daughters of foster carers, particularly in the context of planned or unplanned placement endings?*. Children's Workforce Development Council.